

横山未来子歌集『とく来りませ』

鈴木陽美

歌境の深まり

『とく来りませ』は『午後の蝶』に続く第六歌集。『午後の蝶』は二〇一四年の一年間の「短歌日記」をまとめたものだったが、本歌集は二〇一二年から二〇二〇年初夏までの作品四六一首が収録されている。表紙にグラシン紙を巻き込んで折り返した仮フランス装、天アンカットの潇洒な一冊。

- ・ 星明り強かりし世よただ一人のひとに呼びかくへ疾く来りませ

〈疾く来りませ〉のフレーズは讚美歌九四番の歌詞が元になっているという。あとがきに「イエス・キリストを待ち望む、素朴でひたすらな信仰があらわれたこの言葉に心惹かれます」とあった。キリスト教の信仰をよりどころにしている作者の思いが、歌集タイトルにこめられているようだ。

- ・ 枇杷の花の蜜を逆さになりて吸ふ小鳥の重さが掌は知らず

- ・ 小石の影のうへに小石を置くやうにたしかめてをり今のところを

いずれも繊細な感受性と細部を凝視するまなざしが、一字一句ゆるがせにしない修辭への心配りと相俟って美しい作品世界を構築している。「小鳥」「小石」の小さなものや、つかみどころのない「影」というモチーフを通しての心象の表出に注目した。

- ・ 泰山木の白花ふたつのこる午後日傘のうすき影を運べり

- ・ 帰りきたる部屋の鏡につかの間をひとが見てみしわれを映しつ

主体の描き方が直截ではないところに情感がある。言葉の髪を押し分けていくように歌を読むよろこびがあるのも横山作品の魅力のひとつだ。

- 一方、この歌集は作者の新たな一面も見せている気がした。

- ・ 赤き萼のこる杏の木を見あぐかへらぬもののおほき弥生に

- ・ 木槿の花ひらきて萎む一日に「汚」といふ文字を幾たびも見つ

「弥生」は二〇一一年のそれであるし、

「汚」は原発事故後の放射性物質による汚染をいう。「杏の木」や「木槿の花」を見つめつつも声高ではない時事詠となっている。

- ・ 厚き本の燃えがたければ羽のごとくひらきて置かる胸の上へと

- ・ 落とさぬやうにしづかに拾ひをさめたりまるき大腿骨頭はわれが

感情表白は極力抑えられているが一首目は「二〇一八年七月五日 父・横山泉死去」、二首目は「父は医師だった。」の詞書をもつ。家族を詠うことの少ない作者だが、敢えて父の名前を含む厳然たる事実を詞書に出している。作者自身の文体を崩すことなく詠まれた挽歌は、読者の胸にしづかに迫る。

- ・ 眼に見ゆるひとつの音を指すごとくこゑは貫くこの空間を

この作を含む「空間」一連は、詞書によって久保田利伸のライブがテーマとわかる。開演と終演後の時刻を記す工夫もあり、一首一首がライブの高揚感・臨場感を伝えていた。今までの横山作品には見られなかったテーマと試みではないだろうか。

本歌集は第八回佐藤佐太郎賞を受賞した。ますますの歌境の深まりを示すひとつの到達点ともいえる歌集である。